

マダム貞奴

長谷川時雨

青空文庫

一

人一代の伝を委しく残そうとすれば誰人だれを伝しても一部の小冊は得られよう。ましてその閱歴は波瀾万丈はらんばんじょう、我国新女優の先駆者だやっこであり、泰西たいせいの劇団にもその名を輝かして來た、マダム貞さ奴だを、細かに書いたらばどれほど大部たいぶの人間生活の縮図が見られるであろう。あたしは暇にあかしてそうして見たかつた。彼女の日常起居、生れてからの一切ききを聴いて、それを忠実な自叙伝ふうな書き方にしてゆきたいと願つた。

けれどもそれはまた一方には至難な事でもあつた。芸術の徒と

はいえ、彼女は人気を一番大切にと心がけている女優であり、またあまり過去の一切をあからさまにしたくない現在であるかも知れない。彼女の過去は亡夫 川上音一郎かわかみおとじろうと共に嘗めた辛酸かなであつた。決して恥ずかしいことでも、打明けるに 蹤ちゆう 踏ちよ するにもおよばぬものと思うが、女の身として、もうすでに帝都隠退興行までしてしまつたあととて、何分世話になつてゐる福沢氏への遠慮なども考慮したかも知れないが、その前にも二、三度逢つたおり言つてみたが、微笑と軽いうなづきだけで、さて何日になつても日を定めて語ろうとした事のなかつたのは、全くあの人にとっても遺憾なことであつた。私は貞奴の女優隠退を表面だけ華やかなものにしないで、内容のあるものとして残しておく記念を求めた

かつた。そして自分勝手ではあるがわたしの一生の仕事の一つと思つてゐる美人伝のためにも、またあの人のためにも集の一つを提供して、新女優の祖のために、特別に一冊を作りたいと思つていたが、その希望は実現されなかつた。参考にしたいと思う種々の切抜き記事について、間違いはないかと聞き直したのにも分
明した返事は与えられなかつたから、わたしは記憶を辿つて書くよりほか仕方がなくなつてしまつた。それがため、女優第一人者を、誠意をもつて誤謬なく書残しておこうとしたことが画餅になつてしまつたのを、大変残りおしく思う。

わたしの知人の一人はこういう事をいつてくれた。

「花柳界には止名とめなというものがあつて、名妓めいぎの名をやたらに後の

ものに許さない。それだけの見識をそなえたものならば知らず、あまりよい名は——つまり名妓をだしたのを誇りにして、取つておきにする例がある。たとえば新橋でぽんた、芳町よしちょうで奴やつこというように……」

その芳町の名妓奴やつこが貞奴であることは知らぬものもあるまい。

奴の名は二代とも名妓がつづいた。そして二代とも芳町の「奴」で通る有名な女だつた。先代の奴は、美人のほまれだけ高くて早く亡びてしまつた。重い肺病ふくちであつたが福地ふくち桜痴おうちこじ居士が死ぬまで愛して、その身も不治の病の根を受けたという事であつた。後の奴が川上貞奴なのである。

貞奴に逢つたのは芝居の楽屋でだつた。

いちむらざ

市村座で菊五郎、吉

き

ちえもん右衛門の青年俳優の一座を向うへ廻して、松居松葉氏訳の

「軍神」の一幕を出した、もう引退まえの女優生活晩年の活動時

機であつた。小さな花束を贈つたわたしは樂屋へ招かれていつた。

入口の間には桑の鏡台をおいて、束髪の芳子（その当時の養女、

もと新橋芸者の寿福——後に蒲田の映画女優となつた川田芳子）

が女番頭に帶をしめてもらつて、帰り仕度をしているところ

であつた。八畳の部屋が狭いほど、花束や花輪や、贈りものが飾

つてあつて、腰の低い、四条派ふうの金屏風を廻らした中に、

鏡台、化粧品置台、丸火鉢などを、後や左右にして、くるり

とこつちへ向直つた貞奴は、あの一流のつんと前髪を突上げた

むきなお

（おきだい

まるひばち

きんびょうぶ

めぐ

束髪で、キチンと着物を着て、金の光る丸帯を幅広く結んだ姿であつた。顔は頬がこけて顎のやや角ばつているのが目に立つたが、眼は美しかつた。

とはいえ当年の面影はなく、つい少時^{すこしまえ}前舞台で見た艶麗優雅さは、衣装や鬘とともに取片附けられてしまつて、やや権^{けんだけん}高い令夫人ぶりであつた。この女にはこういう一面があるのだなど、わたしはちよつと気持ちがハグらかされた。

わたしはそのほかに貞奴の外出姿を幾度も見かけた。多くは黒紋附きの羽織をきているが、彼女はやつぱり異国^{エキゾチック}的のおつくりの方が遙かに美しかつた。ある時國府津行の一等車に乗つたおりは純白なショールを深々と豊かにかけていたのが顔を引立^{ひきたて}て見

せた。内 うちさ 幸 いわい 町 ちよう で見かけた時は腕車の膝 ひざ かけの上まで、長い

緑色のを垂らしてかけていたが、それも大層落附いていた。

二度目に新富座へ招かれていつた時に、俳優としてあけっぱ

なしの彼女に、はじめて逢つたのであつた。そのおりは、新派の

喜多村と一座をしていた。喜多村は泉鏡花氏作「滝の白糸」の、

白糸という水芸の太夫になつていた。貞奴はその妹分の優しい、

初々しい大丸鬚の若いお嫁さんの役で、可憐な、本当に素の

貞奴の、甘代を思わせる面差しをしていた。そのおりの中

幕くに、喜多村が新しい演出ぶりを試みた、たしか『白樺』掲

載の、武者小路実篤氏の一幕ものであつたかと思う。殿様が

恋慕していた腰元が不義をして、対手の若侍と並んで刑に処せ

られようとする三角恋愛に、悪びれずにお手打ちにならうとする女と、助かりたさと恐怖に、目の眩んでいる若侍と、一種独特な人世觀を持った殿様とが登場する狂言で、殿様が喜多村緑郎、若侍が花柳章太郎、貞奴が腰元であつた。腰元は振袖の白無垢の裾をひいて、水浅黄ちらめんの振帯を前にたらして、縄にかかつて、島田の鬘を重そうに首を垂れていた。しかしその腰元の歩みぶりや、すべての挙止が、あまりにきかぬ気の貞奴まるだしであつたのが物足りなかつた。何故オフイリヤやデスデモナやトスカや、悄々と敵将の前へ身を投出すヴァンナの、あの幽雅なものごしと可憐さを、自分の生れた国の女性に現せないのでろう、異国の女性に扮するときはあれほど自信のある演出するの

にと思つた。その幕がおわつてから樂屋へ訪れたのであつた。

卓にお膳せんだけ立たてが出来ていて、空席になつてゐるところがわたしのために設けられた場所であつた。貞奴は鏡台をうしろにして中央にいた。すぐそのとなりに福沢さんがいた。ごちそう御馳走の充分なのに干魚ひものがなければ食べられないといつて次の間で焼かせたりした。わたしは（ああこれだな、時折舞台が御殿のような場で樂屋の方から干魚ひものの匂においがして来て、現実暴露げんじめいろうというほどでもないが興味をさまさせるのは――）などと思つていた。福沢さんがお茶づけが食べたいと、女茶碗おんなぢわんのかわいいのへ盛つて、象牙ぞうげの箸はしをそえてもたせた。新富座の樂屋うらは河岸かんしの方へかけて意気な住居すまいが多いので物売りの声がよくきこえた。すると貞奴は、

「早くあの 豌豆えんどうを買つて 頂ちようだい、 塩煎いりよ。」

と注文した。福沢さんがあんなものをといつたが、あたしは大好きなのだからと買わせて食べながら「これは柔らかいからおいしくない」といつて笑つた。

そうした様子がから駄々だだつ子で、あの西洋にまで貞奴の名とどろを轟とどろかして來た人とは思われないまで他たあいがなかつた。飯事ままでごとのようには暮してゐる新夫婦か、まだ夢のような恋をたのしんでいる情人同士のようであつた。貞奴の声は柔かくあまく響いていた。

「昨日きのうはね、瘦やせつぽちつて怒鳴のられたのですよ。この間はね、福ふく桃ももさん、あんなに瘦せたよ——ですつて……」

彼女は煙草タバコをくゆらしながらおかしそうに笑つた。そう言われ

ないでも気がついていたが、彼女の体はほんとに痛々しいほど瘦^やつっていた。肩の骨もあらわならば、手足なぞはほんとに細かつた。その割に顔は痩せが目にたたない、ふくみ綿をするとすつかり昔の面影になる。

(ああ、あの眼が千両なのだ)

あの眼が光彩をはなつうちは楚々^{そそ}たる佳人になつて永久に彼女は若いと眺められた。福沢粹士にせよこの人にもせよ、見えすいた、そんな遊戯気分を繰返すのは、醒^さめた心には随分さびしいであろうが、それを嬉^{うれ}しそうにしている貞奴をわたしは貞淑なものだと思つた。彼女は荒い柄のお召^{めし}のドテラに浴衣^{ゆかた}を重ね、博多の男帯をくるくると巻きつけ、髪は樂屋銀杏^{いちょう}にひつつめていた。

そうしたおりの顔は夫人姿の時よりもずっと趣があつて懐しみがあつた。喜多村が^{たびゆ}旅行^{やく}の役^のことで、白糸の後の幕の扮装^ままでくると、手軽に飲みこみよく話をはこんでいた。

「とても僕たちにはあれだけは分らない。意味の通じないことを二言三言いつて、そのままで別れて幾日か立つと舞台で逢うのだ。それがちゃんと具合よくいつてるのだから分らない。」

福沢さんが、他の人とそんなことを話合つているのを聴き残して、わたしはまた以前^{もと}の見物席の方へかえつて來た。^{しばら}暫くするとドカドカと二、三人の人が、入りのすくない土間^{どま}の、私のすぐ後へ來た様子だつたが、その折は貞奴の出場になつていた。

「ねえ、僕が川上の世話を焼きすぎるといつて心配したり、かれ

こういうものがあるけれど、男は女に惚れているに限ると思うのです。」

そういう特種の社会哲学を、誰が誰に語っているのかと思えば、聴手には後に耳のないわたしで、語りかけるのは福沢氏だつた。わたしは微笑を含みながら眞面目になつて、そのくせ後へはむきもせずに耳をすましていた。

「これが男に惚れこんでごらんなさい。なかなか大変なことになる。印形も要る。名譽もかけなければならぬ。万が一のときは、俺は見そなつたのだなんていう事は逃口上にしかならない。一たん惚れたら全部でなければならぬから——其処へゆくと女の望みは知っています。ダイヤモンド、着物、おつきあ

い、その上で家を買うぐらいなものだから。」

わたしはなるほどと思つた。事業家の恋愛は妙な原則があるものだと感じた。しかし私はまるであべこべなことを感じたのであつた。男同事が人物を見込んでの関係は——単に商才や手腕に惚れ込んだのは、どん底にぶつかつたところが——自今^{いま}の世相から見て、生命^{いのち}をかけたいわゆる男の、武士道的な誓約のある事を、

寡聞^{かぶん}にして知らないから——物質と社会上の位置とを失えば、あるいは低めれば済む^すのである。男女の愛情はそうはゆかない。譬^{たと}い表面は何事もなかつたおりは、あるいはダイヤモンド、おつきあい、着物、家ぐらいですむかも知れないが、それは悲しい真に貧乏^{プーラ}な恋愛で、そんな水準^{レベル}におかれた恋愛で満足している男女が

ありとすれば、実にお氣の毒なものといわなければならぬ。わたしは言う、感情、感覚、全精神を打込んだ男女恋愛のどん底は魂の交感であり、命の掴みあいである。死と生が其處にあるばかりで何物をもまじえることの出来ない絶対のものであらねばならぬ。

(けれどこの人は、愛するものにとはいわなかつた。惚れたという普通軽く言いはなされる言葉をつかつた。そこに用意があるのかも知れない。)

と思うとまた貞奴の、先刻の褪めきつていて陶酔しているようなどりなしが目に浮んだ。

では白熱時代の貞奴は？

わたしは急がずに書いてゆこう。四、五年前に京都から来て内幸町の貞奴の家へ草鞋をぬいだ、祇園わらじぎおんのある老妓はこう言つたことがある。

「芝居から帰ると二階へあがつて、寝る前に白葡萄ぶどうしゅ酒をあがるのえ、わたしもお相伴しょうばんするわ。それから寝るまで話をします。けれど、川上さんのお位牌いはいには私が毎日拝んでおいてあげます。お貞さん香華こうげもあげやせん。あの人は強い人で、しまいには川上さんとも仲がようのうて、あつちの室へやとこつちの室とに別れて、財産も別だつたような——」

この老妓の談話は賤しかつた。香華こうわを手向むかけないゆえ不貞だというようにもきこえたが、あれほど立派に川上の意志をついでい

れば、それをこそ川上は悦んでよいのである。仲がよくなくなつたといわれた亡夫の意志を、何處までも続いで名声を持してゆこうとするのには、どれ位人知れぬ苦勞があつたか知れはしない。

あの勝氣な松井須磨子が、人気のある盛りの身で、一人になれば、猶更自由でありそうなものに思われてさえ、先生抱月氏に別

れては、楯なしでは突進も出来なかつたではないか。それをもう衰運であり、他に彼女を引立てて、一座の明星プリマドンナと輝かせ得るほどの対手あいてかたをもつていなかつた彼女が、貞奴の名を忘れない

ものにさせるのにどんな気苦労をしたか——老妓は金錢問題のことと言つたが、多年、川上のためには、彼女は全身を投出して來た人である。僅少の貯蓄わずかたくわえで夫妻が冷たくなろうとは思われる理

由がない。老妓の推測は自分だけの心にしかわからなかつたのであろう。老妓の目に夫妻の金銭問題と見えたのは、事業と一家の経済との区別をたてたのを悪くとつたのではあるまいか？ 彼女も女である。ことに気は剛でも身体は纖弱い。からだ かよわ 心の労れに撓むこともあつたであろう。そういうおり夫の果しもない事業慾に——それもありふれた事をきらう 大懸おおがかりの仕事に、何もかも投じてしまふ癖くせのあるのを知つて、せめて後顧こうこの憂いのないようにと考えたのではなかろうか。それはあの勝気な女性にも、長い間の辛労を、艱難困苦を思出すと、もう欠乏には堪えられそうもないと思うような、彼女の年が用意をさせたのでもあろうか——

川上なくが亡なるすこし前の事であつた。貞奴夫婦を箱根で見かけ

た時は、貞奴は浴衣がけで宮の下から塔の沢まで来た。その折など決して彼女が、自分の財袋だけ重くしている人とは見られなかつた。彼女は夫のためにはいかにも真率で、赤裸々でつくしていたと、わたしは思つてゐる。我儘で自我のつよい芸術家同士は、ときには反感の眼をむいて睨みあつたことがあつたかも知れない、あるいは川上の晩年には互いの心に反りが出て、そういう日が多かつたかも知れない。けれどもわたしは貞奴を貞婦だと思う。

気性もの、意地で突つ張つてゆく、何処までも弱い涙を見せまいとする女——そういう人に貞奴も生れつてゐるようだ。そうした生れだちのものは損なのは知れている。女性は気弱く見える

方が強きょう 鞠じゅうだ。しつかりと自分だけを保護して、そして比較的
安全に他人の影にかくれて根強く棲息せいきそくする。強気のものは我に
頼んで、力の折れやすいのを量らざに一気に事を為し遂げようと
する。ことに義侠心と同情心の強いものがより多く一本氣で向う
見ずである。

わたしは自分の氣質からおして、何でもかでもそうだと貞奴を
この鑄型いがたに嵌めようとするのではないが、彼女も正直な負けすぎ
らいであつたろうと思つてゐる。そしてそういう氣質のものが胸
算用をしいしい川上を助けたとはどうしても思われない。彼女は
強い、それこそ、身を炎にしてしまいそうな自分自身の信仰を傾
け尽して、そこに幾分か的好奇心を交えて、夫川上の事業を助け

たのであろう。そこにはまた、彼女の生れた血が、伝統的義侠と
 物好^{ものづき}な江戸人の特色を多く含んでいた事や、氣負い肌^{はだ}の養母に
 育てられた事や、芝居と小説の架空人物に自らをよそえた、偽り
 の生活を享樂している中に住んで、不安もなく、むしろ面白おか
 しく日を送っていた若き日のことであるゆえ、彼女は自分という
 ものの力が、夫にとつて、そのまた新らしい事業にとつて、どれ
 ほど有力なものであるかと知つたときに、全く献身的な、多少冷
 静に考えるものには、無鉄砲な遊戯と見えるほどな冒險も敢^{あえ}てし
 たのであろう。そうした人が金錢のことから他人がましくなろう
 はずはない。もしなつたとすれば、それは夫妻の内部から破綻^{はたん}が、
 表面にまで及ぼしてきて、物質関係まで他人がましくなつたのだ

と思わなければならぬ。その折はすでに愛情は冷却して、そのくせの方は、あまり高価な、かけがえのない犠牲を払つて來た若き日の、あの尊とうとかりし我熱情の、徒いたずらに消耗された事を思い嘆くあまりの、焦燥から來た我執とみなければなるまい。

けれど、もし仮にそうであつたとすれば貞奴の思違いであつた。彼女は夫を助けたのであろう。夫のために犠牲として、夫の事業の傀儡かいらいとなつたのであろう。けれどそれは最初のことで、運命は転換した。演劇に新派を建立し、翻訳劇に彼地の風俗人情、思想をいちはやく紹介した川上の事業はとにかく成功した。かげでこそオッペケペなどと旗上げ當時を回想して揶揄やゆするものもあつたが、演劇界に新たな一線を劃かくすだけのことを川上はやり通した。

そして、それと同時に、川上の成功に比して劣らぬ地歩を貞奴もしめたのである。難に堪え得た彼女の体が生みだした成功と名譽である。けれど、けれど、けれど、其処に川上という具眼者がなくて彼女の今日があつたであろうか。

いえ、それは誰れよりもよく、当の貞奴が知つてゐる。彼女は一も川上、二も川上と、夫を立てていた。負けぬ気の彼女も川上には心服していた。それはどのような英雄、豪傑にも裏はある。美点も弱点も、妻と夫ほど知り尽すものがあろうか。^{かわらたま}瓦を珠とおもう愚者でないかぎり、他人には傑い夫も、妻は物足らぬ底を知るものだ。貞奴と川上との間だけがそれらの外とはいえない。それですら貞奴は夫を傑いと思つていた。一面には罵りながら、一

面には敬していたに相違ない。

罵るとは？ 心中に軽蔑^{けいべつ}していたことである。彼女にはともすれば拭^{ぬぐ}われがたい汚辱を感じることがあるであろう。夫が無暴^{むぼう}な渡航を思立つて、見も知らぬ外国へ渡り窮乏したおりのことである。また一座十九人に、食物も与えられなかつたおりのことである。雪のモスクワで——さまよいあかした亞米利加^{アメリカ}で——彼女が身を投捨て人々の急を救つたといわれている。それは彼女にも苦痛な思出であったであろう。それからぬか噂^{うわさ}には、折々川上が貞奴に辱^{はずか}しめられていたこともあるといわれた。

敬さなければならぬ第一は、いうまでもなく彼女が女優として舞台生活をする第一歩を与えたことである。彼女の夫が

彼女を舞台にたたせたのは、他の必要から來た——あるいは人気取り策であつたかも知れなかつた。けれど、その当否はともかくとして、我国の、新女優の先驅者としては、此後こんごどれほどの名女優が出ようとも、川上貞奴に先覚者の栄冠はさすけなければなるまい。技芸はどうでも、顔のよしあしは如何どうでも、ただそれだけでも残り止とどまる名であるのに、何という運のよいことか、貞奴は美貌びほうであり、舞台も忽かおろそでない。彼女は第二の出雲いづものお国であつて、お国より世界的の女優となつた。

人はあるいは時勢がそうさせたのだというかも知れない。なるほど彼女は幸運な時に出たのである。とはいえ世人の要求よりはずつと早く彼女は生れ、そして思いがけぬ地歩を占めている。松

井須磨子の名は先輩の彼女より名高く人気があるようと思われたが、とても貞奴の盛時の素晴しかったのには及ばない。悲しくも年を取るという事が何よりも争われない人気の消長であるのと、よい指導者を持ったと、持たないと、懸隔かけへだてが、あの粗野な、とても優雅な感情の持主にはなれない、女爵おんなしゆう長ちよのような須磨子を劇界の女王、明星プリマドンナとした。貞奴に学問はなくとも、もすこし時代の潮流を見るの明めいがあつたならば、何処までも彼女は中央劇壇の主星スターであつたであろう。創作力のない彼女は、川上歿ぼ後づこも彼れによつて纏まとめてもらつた俳優の資格を保守するに過ぎなかつたが、時流はグングンと急激に変つていつた。彼女は端の方へ押流され片寄せられてしまつて、早くも引退を名にした興行で

地方を廻らなければならぬようにされてしまった。時代の要求は女優を必要とし、多くの急造女優は消えたり出たりしている。

帝劇が十年の月日のうちに候補者を絶えず補充しながらも、律子、嘉久子、浪子の第一期生のうちの幾人かを収穫したにすぎず、あとはまだ未知数になつてゐる。その他の劇団では何もかもたつた一人の須磨子を死なせてしまつては、もうあとは語るにも足りぬ有様となつてしまつた。

そんなであるに、もう貞奴は忘れられたものになつてゐる。彼女はもうお婆さんであるから人気をひかないというような、当事者の思いあまりからばかり、彼女が圈外に跳退けられたのではなく、若いおり聰明そうめいであつた彼女の頭が、すこし頑迷がんめいになつた

ためではあるまいか、若いうちは皮相な芸でも突きこんでゆこうとする勇気があった。後にはただ繰返しにすぎないものとなつて、すこしの進境もなく、理解のともなわぬ、ただお芝居をするだけになつた芸道の堕落のためだと思う。そうした真価の暴露されたのは、川上を失つたためであるといつて好いであろう。

川上とて、いまも生きて舞台に立つていたならば、新派創造時代の雑駁ざっぱくな面影をどどめていて、むしろ恥多き晩年であつたかもしれない。しかし彼が動かずに、いつまでも自分に固定していようとは思われない。一層彼は黒幕になつて画策したことであろう。彼はきっと女優全盛期に向つている機運をはずさず、貞奴をもつと高める工夫をこらしたに違いない。

それとも、彼女が願うように——いま福沢さんが後援してい
るよう——表面だけ賑^{にぎや}かしの興行政策をとつたかも知れない、
貞奴自身の望みとあれば……

貞奴に惜しむのは功なり名遂げてという念をおこさずに、何処
までも芸術と討^{うちじに}死の覚悟のなかつた事である。努力が足りなか
つたと思う。わたしのいう努力とは、勢力運動のことではない。
教養の事である。新時代に適するように頭を作る必要であつた。
そしたらいま彼女はどんな位置にいられたろう。芸術に年齢^{とし}のあ
るはずはない。

貞奴は導かれて行きさえすればきっと進んでゆく人である。あるいは、もうあれだけで充分ではないか、随分花も咲かせて來た、^{あと}後のことばは後のものにまかせて、ちつとは残しておいてやつた方がよいと言うものがあるかも知れない。それは貞奴の生涯の、前半生の^{ページ}貞だけを繰つてそれで足れりとする人のいう事である。何にも完全はのぞまれないとても、わたしという慾張りは、おなじ時代に生れた女性の、一方の代表者を、よりよく、より輝かしい光彩をそえて、終りまでの貞を、立派なものにして残したいと望んだからであった。小さな断片でも永久に亡びない芸術品はあるが、貞奴のそれは大きく、広く、波動に包まれた響きの結晶で

ある。それが末になつて崩れていたならば、折角築きあげられたものの形を完全な^な_ないではないか、わたしの理想からいえば、貞奴の身体が晩年にだけせめて樂をしようとするのに同情しながらも、それを許したくなく思つた。芸術に生き、芸術に滅びてもらいたかつた。雄々^{おお}しく戦つて、瘦枯^{やせが}れた躯^{からだ}を舞台に横たえたとき、わしたちはどんなに、どんなに彼女のために涙をおしまないだろう。讃美するだろう。美しい女優たちは、自分たちの前にたつて荊棘^{いばら}の道を死ぬまで切りひらいた女の足許^{ひとと}に平伏^{ひれふ}して、感謝の涙に死体の裳裾^{もすそ}をぬらし、額に接吻^{さき}し、捧ぐる花に彼女を埋めつくすであろう。詩人の群はいみじき挽歌^{ばんか}を唄つて柩^{うた}の前を練りあるくであろう。楽人は悼^{いた}みの曲を奏し、市人は感嘆の声をおします、

文章家は彼女が生れたおりから死までが、かくなくてはならぬ人に生れたことを、端^{たん}嚴^{ごん}な筆に綴^{つづ}りあわせたであろう。わたしはそうした終りを最初の女優のこの人に望んだ。そう望むのが不^ふ当^{とう}であろうとは思つていない。

引退のおりの配りものである茶碗には自筆で、

兎^とも角^{かく}ものがれ住むべく野菊かな

の詠がある。自選であるか、自詠であるかどうかは知らないが、それにしても最初の句の「ともかくも」とは拠^{よん}どころなくという意味も含んでいる。仕方がないからとの捨^{すて}鉢^{ばち}もある。まあこんな事にしておいてという糊塗^{こと}した氣味もある。どこやらに押付けたものを籠^こめていて不平がある句といつてもよい。「とりあえず」

「どうやらこうやら」という意にも訳せないことはないが、それでは嘘になる。何故ならば、彼女の引退は突然の思立ちかも知れないが、そうした動機が読みこまれているようにはとれないほど準備した興行ぶりであつた。住む家もこれからの生活も安定なものである事は誰れも知つたことで、無常を感じたり、禪機などから一転して急に世からのがれたくなつたのではない事はあんまり知れすぎていた。それゆえに、草の中へでもかくれてしまおうといふような「とりあえず」には思いおよぶことが出来ない。もしまた、亡夫川上の墓石もたてたから、これをよい時機として役者を止めようとしたのであつたならば、貞奴の光彩のなくなつたのも尤もだと、頷かなければならないのは、あれほどの人でも役

者をただ商売としていたかと思うそれである。

思わずも憎まれ口になりかかつた。わたしがそう言うのも、その実は、この女優の引退をおくるに世間があんまり物忘れが早くて、案外同情を寄せなかつたことに憤慨したゆえでもあつた。わたしはせめてこの優に^{ひと}_{つちかわ}培養された帝劇の女優たちだけでも、もすこし微意を表して、所属劇場で許さなくとも、女優たちの運動があつて、かの女の最終の舞台を飾り、淋しい心であろう先輩を悦ばせてもよかつたであろうにと思つた。

彼女は日本の代表的名女優として海外にまでその名を知られてゐる。かえつて日本においてより外国の方が名声は嘖々^{さくさく}としている。進取邁進^{まいしん}した彼女のあとにつづいたものは一人もない。

もうその間あいだは十幾年になるが、一人として彼女の墨るいを摩ましたものはないではないか。それは誰れでも自信はあるであろう。貞奴に負けるものかとの自負はあつても、他から見るとそれは許されぬ。それは彼女の技芸そのものよりは度胸が、容姿が、どんな大都会へ出ても、大劇場へ行つても悪びれさせないだけの資格をそなえている。貞奴のあの魅惑のある艶冶えんやな微笑みとあの嫋々ほほえたる悩ましさと、あの楚々そそたる可憐かれんな風姿とは、いまのところ他の女優の、誰れ一人が及びもつかない魅チヤーム力と風趣とをもつてゐる。

彼の地の劇界で、この極東の、たつた一人しかなかつた最初の女優に、梨花りかの雨に悩んだような風情ふぜいを見出いだして、どんなに驚異の眼を見張つたであろう。彼女のその手嫋たおやかな、いかにも手嫋女たおやめと

いつた風情が、すつかり彼地の人の心を囚とらえてしまった。あの強い意志の人の舞台が、ここまで可憐であろうとは、ほんとに見ぬ人には信じられないほどである。それはわたしの巔ひいきめ鳳目めいめがそう言わせるのではない。彼地の最高の劇評家にも認められた。アーサー・シモンズも著書の頁のいく部分を彼女のために割いた。

それは彼女の過去の辛苦が咲かせた花であろう。外国へ彼女が残して来た日本女の印象が、決してはずかしくないものであつたことだけでも、後から出たものは感謝しなければならない。後の中ものは時代の要求によつて生れて來たとはいゝ、彼女の成功を見せた事が刺戟しげきになつてゐる事はいうまでもない。彼女が海の外へ出ていてした仕事も、帰朝かくえいつて来て當時の人に目新しい扮装ぶり

を見せたのも、現今の女優のまだ赤ん坊であつたころのことである。策士川上ヒロマツが貞奴の名を揚げるために種々と、世人的好奇心をひくような物語を案出するのであろうとはいわれたが、彼女の技艺に、姿色に、魅惑されたものは多かつた。それは全く、彼女によつて示された、「祖国」のヒロインや「オセロ」のデスデモナなどは、今日の日本劇壇にもちよつと発見することが困難であろうと思うほど立派なもので、ありふれた貧弱なものではなかつた。最初の女優を迎えた物珍らしさと、憧憬どうけいする泰西の劇をその美貌の女優を通して見るという事が、どれほど若い者的心を動かしたか知れなかつた。京都で大学生が血書をして切ない思いのあまりを言い入れたとかいうような事は、貞奴の全盛期には

すこしも珍らしい出来ことではない。そんな事に耳をかしていたならば、おそらくはも一人別に彼女というものがあつて、専念そ
れらの手紙や会見の申込みに一々氣の毒そうな顔をして断りをい
つたり書いたり、謝つたり、悦んだりしていなければならぬので
あろう。文壇の人では秋田雨雀氏あきたうじやくが貞奴心醉党の一人で、その
熱烈至純な、貞奴讚美党であつた。いまでその話が出れば秋田
氏はごまかさずに頷く、

「まつたく病気のように心酔していたのですね、どんな事をして
も見ないではいられなかつたのだから」

はつきりとそう言つて、古き思出もまた楽しからずやといつた

さまで、追憶の笑えみをふくまる。わたしの眼にも美しかつた貞奴のまぼろしが浮みあがつて、共に微笑しつつ、秋田さんの眼にもまだこの幻は消えぬのであろうと思うと、美の力の永遠なのと、芸術の力の支配とに驚かされる。

その話は今から十五、六年前、明治卅五、六年のことかと思う。第二回目の渡航をして西欧諸国を廻つて素晴らしい人気を得た背景をもつて、はじめて日本の劇壇へ貞奴が現われたころのことであつた。^{ドイツ}独逸では有名な学者ウイルヒョウ博士が、最高の敬意を表して貞奴の手に接吻^{せっさん}をしたとか「トスカ」や「パトリ」の作者であるサルドーが親しく訪れたという事や、露西亞^{ロシア}の皇帝から

は、ダイヤモンド入りの時計を下賜されたという事や、いたる土地の大歓迎のはなしや、ホテルの階段に外套を敷き、貞奴の足が触れたといって、狂氣して抱えて帰つたものがあつたことや、貞奴の旅情をなぐさめるためにと、旅宿の近所で花火をあげさせばかりいた男の事や、彼女の通る街筋の群集が、「奴、奴」と熱狂して馬車を幾層にも取廻いてしまつたという事や、いたるところでの成功の噂が伝わつて、人気を湧立たせた。正直な文学青年の秋田氏が、美神が急に天下あまくだつたように感激したのは当り前だつた。そしてまた出現した貞奴も観衆の期待を裏切らなかつたのであつたから、人気はいやがうえに沸騰し、熱狂の渦をまかせた。そのおり可哀そうな青森の片田舎から出て來ていた貧乏

な書生さん秋田は、何から何までも芝居の場代のために売らなければならなかつたのだ。場代といつても、桟敷や土間の一等観覧席ではない、ほんの三階の片隅に身をやつと立たせるにすぎなかつたが、それでも毎日となれば書生の身には大変なことであつた。すっかり貞奴熱に昂奮してしまつた少年秋田は、机と書籍の幾冊かと、身につけていた着物だけは残したがあとはみんな空しくしてしまつた。しまいには部屋の畳の表までむしりとつて売払い、そして毎日感激をつづけていたとさえ言われる。

こんな清教徒の渴仰（ピヨリタン）（かつこう）を、もろもろの讃詞（さんじ）と共に踏んで立つた貞奴の得意さはどれほどであつたろう。それにしても彼女におしむのは、彼女が芸を我生命として目覚め、ふるいたたなかつた

遺憾さである。それは余儀ない破目から女優になつたとはいえ、ここまでに成功してゆけば、どれからはいつて歩んだとしても、道はひとつではないか、けれど、立脚地が違うゆえ、全生命を没頭しきれないで、ただ人気があつたというだけにしてその後の研鑽琢磨たくまを投げ捨ててしまい、川上の借財をかえしたのと、立派な葬式を出したのと、石碑を建てたからよい引きしおであるというだけが、引退の理由なのが惜しい。最初から女優として立つ心はちつともなかつたが、海外へ出て困窮のあまりになつたのが動機であり、その後、断然廃めるつもりであつたのを、夫や知己に説かれて日本の舞台へも立つようになつたとはいえ、それではありますこの女優の生涯が御他力おたりきで、独創の見地がなく、女優生活の長

い間に自分の使命のどんなものかを、思いあたつたおりがなかつたのかと、全く惜まれる。ほんとにおしい事には、芸術最高説の幾分でも力説してきかせるような人が彼女の傍近くにいなかつた事である。彼女には意地が何よりの命で、意氣地そばを貫くという事がどれほど至難であり、どれほど快感であり、どれほど誇らしいものであるか知れないと思つてゐるのである。功なり名遂げ、
 身退くみりぞという東洋風の先例にならい、女子としては有終の美をなしたと思つたであろう。貞奴なとという日本新劇壇の最初にもつた女優には、何処までも劇に没頭してもらいたかつた。あの人の墨るいを摩まそうと目標にされるような、大女優にして残したかつた。こういうのも貞奴の舞台の美を愛惜するからである。

貞奴は 瘡瘍^{かんしゃく}持ちだという。その瘡瘍が薬にもなり毒にもなつたであろう。勝氣で瘡瘍持ちに皮肉もののあるはずがない。それを亡川^{なき}上の直系の門人たちが妙な感情にとらわれて、貞奴の引退興行の相談をうけても引受けなかつたり、建碑のことでも楯^{たて}を突きあつているのはあまり狭量ではあるまいか。かつて女優養生所に入所した、作家田村俊子さんは、貞奴を評して、子供っぽい可愛らしい、殊勝らしいところのある、初々^{ういいうい}しくも見えることのある地方の人の粘^ねぱりづよい意地でなく、江戸つ子^{はだ}肌の勝気な意地でもつ人で、だから弱々と見えるときと、傍^{そば}へも寄りつけぬほど強い時とがあつて、

「愚痴をいうのは嫌いだからだまつてはいるけれども、何につけて人というものは深い察しのないものね」

などいつてる時は、ただ普通の、美しい纖弱かよわい女性とより見えないが、ペパアミントを飲んで、氣焰きえんを吐いている時なぞは、女でいて活社会に奮闘していいる勇気のほども憚ばれると言つた。それでも芝居の樂の日に、興行中に贈られた花の仕分けなどして、片づいて空からになつた部屋に、帰ろうともせず茫ぼうぜん然と、何かに凭れている姿などを見ると、ただなんとなく涙なみだぐ含まれるときがある。マダム自身もそんなときは、一種の寂寥せきりょうを感じてはいるのであるともいった。

寂寞——一種の寂寞——気に驕おごるもののみが味わう、一種の寂

寞である。それは俊子さんも味わつた。その人なればこそ、盛りの
人貞奴の心裡の、何と名もつけようのない憂鬱ゆううつ^{みの}を見逃がさなかつたのであろう。

貞奴は、故 市川九女八いちかわくめはちを評して、

「あの人も配偶者えらが豪かつたら、もすこし立派に世の中に出てい
られたるうに、おしい事だ」

といつたそうである。これもまた貞奴なればこそ、そうしみじみ
感じたのだ。自分の幸福なのと、九女八の不幸なのとをくらべて
見て、つくづくそう思つたのであろう。それから推しても貞奴が、
どれほど夫を信じ、豪いと思つていたかが分る。川上にしても貞
奴に對してつねに一步譲つていた。貞奴もまた負けていなかつた

が、自分が思いもかけぬような名をなしたのも川上があつての事だ、夫が豪かつたからである、みんなそのおかげだと敬していたと思える。そうした敬^{けい}虔^{けん}な心持ちは、彼女の胸にいつまでも摺^すりへらされずに保たれていたゆえ、彼女がつくらすして可憐であり初々しいのだ。彼女の胸には恒^{つね}に、少女心^{おとめごころ}を失わずにいたに違いない。

わたしはいつであつたか歌舞伎座の廊下で、ふと耳にした囁^{ささや}きをわすれない。それは粹^{いき}な身なりをしている新橋と築地辺の女人らしかつたが、話はその頃^{としま}噂^{うわさだ}立つた、貞奴対福沢さんの問題らしかつた。その一人の年増^{ひと}が答えるところが耳にはいった。
「それは違うわ、先の妻^{せん}はああした女^{ひと}でしよう。貞奴さんはそ

じやない、あの人のことだから、お宝のことだつて、忍耐がまんが出来
るまでは口にする人じやなし、それに、ああすればこうと、ポン
といえば灰吹きどころじやなく心持ちを読んで、痒かゆいところへ
手の届くように、相手に口をきらせやしないから、そりやまるで
段違たんちがいだわ、人間がさ』

それだけの言葉のうちに以前の寵ちようぎ妓妓であつて、かえり見られ
なくなつた女と、貞奴との優劣がはつきりと分るような気がした。
ほんの通り過ぎたにすぎないので、そのあとでも聴きたい話題はなしひ
があつたかも知れない。

順序として貞奴の早いころの生活についてすこし書かなければ
ならない。わたしがまだ稽古けいこほん本のはいつたつばくろぐちを抱え

て、大門通を住吉町まで歩いて通つていたころ、芳町には抱え車のある芸妓があるといつてみんなが驚いているのを聞いた。わたしの家でも抱え車は父の裁判所行きの定用のほかは乗らなかつたので、何でも偉い事は父親が定木であつた心には、なるほど偉い芸妓だと思つた。一人は丁字屋の小照といい、一人は浜田屋の奴だと聞いていた。小照は後に伊井蓉峰の細君となつたお貞さんで、奴は川上のお貞さんであつた。浜田屋には強いおつかさんがいるのだという事もきいたが、わたしが気をつけて見るようになつてからは、これもよい縲緼きりょうだつた小奴という人の御神灯がさがつていて奴の名はなかつた。そのうちにおなじ住吉町の、人形町通りに近い方へ、写真屋のような入口へ、黒塗の

サインプレート 看板 がかかるつて、それには金文字で川上音二郎とするされてあつた。そして其処が奴のいるうちだと知つた。またその後、大森の、汽車の線路から見えるところへ小さな洋館が立つて、白堊造りが四辺とは異つてゐるので目にたつた。それも川上の新らしい住居である事を知つた。それは鳥越とりこえの中村座で川上の旗上げから洋行までの間のことである。

三

歴代の封建制度を破つて、今日の新日本が生れ、改造された明治前後には、俊豪、逸才が多く生れ、はぐくまつちか育くまれ培われつつあつた

時代である。貞奴は遅ればせに、またやや早めに生れて來たのである。生れたのは明治四年であつた。そして後年、貞奴に盛名を与えるに、柱となり、土台となつた人々が、みな適當な位置に配置されて、彼女の生れてくるのを待つ運命になつていた。

もし彼女の生家が昔のままに連綿としていたならば、マダム貞奴の名は今日なかつたであろう。新女優の祖川上貞奴^{はは}とならずに堅気^{かたぎ}な家の細君であつて、時折の芝居見物に鬱^{うつさん}散する身となつていたかも知れない。

明治維新のことを老人たちは「瓦解^{がかい}」という言葉をもつて話合つてゐる。「瓦解」とは、破壊と建設とをかねた、改造までの恐しい途程^{みちのり}を言表^{いいあら}わした言葉であろう。すべての旧慣制度が破

壊された世の渦は、ことに江戸が甚しかつた。武家に次いでは名ある大町人がバタバタと倒産した。お城に近い日本橋 両替りょうがえぢょ（現今の大日本銀行附近）にかなりの大酒店おおだなであつた、書籍と両替屋をかねて、町役人も勤めていた小熊という家もその数には洩れなかつた。家附いえつきの娘おたかは御殿勤めの美人のきこえたかく、入婿いりむこの久次郎は仏さまと呼ばれるほどの好人物であつた。

そうした円満な家庭にも、吹きすさぶ荒い世風は用捨もなく吹込んで、十二人目にお貞と呼ぶ美しい娘が生れたころは、芝神明しんめいのひとりに居を移して、書籍、薬、質屋などを営んでいた。しかも夫婦は贅沢ぜいたくを贅沢としらずに過して來た人たちであつたので、娘たちを育てるにもかなり華美な生活をつづけていた。次第々々

に家産が傾くと知りつつもそれを喰止めるだけの力がなかつた。ついに窮乏がせまつて来て十二人目の娘を手離すようになつた。そ

してお貞という娘が、他家で育てられるようになつたのは彼女の七歳のときからで、養家は芳町の浜田屋という芸妓屋であつた。

浜田屋の亀吉は強情と一国と、侠で通つた女であつた。豪奢^や

の名に彼女は氣負つていた。その女を養母とした七歳のお貞は、子供に似合わぬピンとした氣性だつたので、一寸のくるいもないように、養母と娘の心はぴつたりと合つてしまつた。その点はお貞の貞奴が、生^{うみ}の親よりもよく養母の氣性と共通の点があつたといえる。

とはいへ、そうした侠妓に養われ、天賦の素質を磨いたとはい

え、貞奴の持つ美質は、みんな善き父母の授けたものである。優雅、貞淑——そういう社会に育つたには似合わぬ無邪気さ、それは大家の箱入り娘と、好人物の父との賜物である。一本気な持前も、江戸生れの下町のお嬢さんの所有でなければならぬ。其処へ養母によつて仁侠にんきょうとたんかと、歯切れのよい婆婆しゃばつ氣つけを吹き込まれたのだ。そうした彼女は養母の後立うしろだてで、十四歳のおりはもう立派な芳町の浜田屋小奴であつた。

廿九歳で後家ごけになつてから猶なおさら更パリパリして いた養母の亀吉は、よき芸妓としての守らねばならぬしきたりを可愛い養娘むすめであるゆえに、小奴に服膺ふくようさせねばならないと思つていた、その標モ語——芸妓貞鑑げいしゃていかんは、みな彼女が実地にあつて感じたことで

あり、また古来の名妓について悟つた戒めなのであつた。彼女は言う。

「好い芸妓になるなら世話を下さる方を一人と極めて守らなければいけない。それが芸妓の節操みさおというものだ。金に目がくれて心を売つてはいけない。けれども不粹ぶすいなことはいけない。芸妓は世間を広く知つていなければいけない。そして華やかな空氣なまこにいなければならない。地味な世界は他ほかに沢山ある。遊ばせるという要は窮屈きびではいけない。だからお客様よりも馬鹿で浮氣な方がよい。理につんだ事が好きならば芸妓にはしゃがしてもらいにきはしない。そこで、浮氣なのはよいが、慾に迷えば芸妓の估券こけんは下つてしまふ。大事な客は人と極めてその人の顔をどこまでも立

てなければならぬかわりに、腕でやる遊びなら、威勢よくぱつとやつて、自分の手から金を撒まかなければいけない。堅気ではないのだからむずかしい意見はしない。だがよく覚えてお置き、遊びだということを……」

それは彼女が十六のおり、初代奴の名を継いで、嬌名いや高くうたわれるようになつたおりの訓戒だ。賢なる彼女は、養母の教えを強しかと心に秘めていたが、間もなく時の総理大臣伊藤博文侯が奴の後立てであることが公然にされた。彼女はもう全く恐いものはなしの天下になつたのである。総理大臣の勢力は、現今よりも無学文盲であつた社会には、あらゆる権勢の最上級に見なされて、活殺与奪の力までも自由に所持してでもいるように思いなされて

いた。そして伊藤公は——かなりな我儘わがままをする人だというので憎み罵ののしるものもあればあるほど、畏敬いけいされたり、愛敬あいきょうがあるとて聾ひいき員いんも強かつたり、ともかくも明治朝臣のなかで巍然ぎぜんとした大人物、至るところに艶材まを撒きちらしたが、それだけ花柳界においても勢力と人気とを集中していた。奴は客としては当代第一たる人を見立てたのである。家には利者きけものの亀吉かめきちという養母が睨にらんでいる。そして何よりも——眠れる獅子王しじおうの傍に咲く牡丹花ぼたんかのようない容顔、春風になぶられてうごく雄獅子の髭ひげに戯むれ遊ぶ、翻へんぱん翻ほんぱんたる胡蝶こちようのようない風姿すがた、彼女たちの世界の、最大な誇りをもつて、昂然こうぜんと嬌坊第一にいた。

彼女も、そうした社会の女人によにんゆえ、早熟だつた。彼女は遊び

としては、若手の人気ある俳優たちと交際まじわつっていた。そして彼女がもつとも好んだものは弄花ろうか——四季の花合せの争いであつた。金びらのきれるのと、亀吉仕込みの鉄火てつかとが、姿に似合ぬしたたかものと、姐ねえさん株にまで舌を巻かした。

奴の芸妓としての盛時は十七、八歳から廿一歳ごろまでである。

奴は芸妓時代から変りものであつた。その時分ハイカラという新熟語ことばはなかつたが、それに当てはめられる、生粹きつすいなハイカラであつた。廿二、三年ごろには馬に乗り、玉突きをしたりしていった。髪もありあまるほどの濃い沢山なのを、洗髪のねじねじりつけなしの束髪にして、白い小さな、四角な肩掛けを三角にかけていた。

大磯の海水浴の漸く盛りになつた最中、奴の海水着の姿はいつでも其処に見られ、彼女の有名な水練は、この海でおぼえたのであつた。

「奴が来ておりましたよ、大磯の濤竜館に……男見たような女ですね、お風呂で、四辺にかまわいで、眞白に石鹼をぬつて、そこら中あぶくだらけにして……」

そんなことを、あるおり、某華族の愛妾が言つていたことがあつた。その語のなかには、すこし反感をふくんだ調子があつたが、「沢山な毛髪のかみのけのなんのつて、お風呂の中といて、ぐるぐると巻いているのを見ると、ほんとにその立派なことつて……」

彼女の傍若無人であつたことには、好い心持ちではなかつたら

しいが、その容姿については感嘆していた。それはたしか彼女が十九位のことであつた。

その後わたしが、漸く芝居のことなどもすこしばかり分りかけて来た時分に、芳町の奴が川上音二郎のおかみさんになるのだつてというのをきいて、みんなが驚ろいている通りに、大層な事件のようにきいていたことがあつた。それは明治廿五年、奴が廿二歳のおりだと後で知つた。なんでわたしが大事件のように耳にとめていたかというのに、前にも言つた通り、芳町は近い土地であり、往来に浜田屋の門口かどぐちも通つたり、自然と奴の名も聞き知つていたからであつた。それに、浅草鳥越あさくさとりこえの中村座に旗上げをした、川上音二郎の壯士芝居の人気は素晴らしかつたので――

彼のが俳優として非凡な腕があるからというのではなく——書生が（自由党の壮士が）演説と芝居とを交ぜてするという事が、世間的好奇心を誘つて評判されていた。わたしはその頃ぼつぼつと新聞紙や、『歌舞伎新報』などをそつと読みふけつていたので、耳から聞く噂ばかりでなく、目からもそれらの知識がすこしはあつた。それに父は自由党員に知己も多かつたので、種々話をしているときもあつた。川上の他に、藤沢浅一郎ふじさわあさじろうは新聞記者だとか、福井は『東西新聞』にいたがとか、壮士芝居の人物を月旦げつたんしていることもあつた。見物をたのまれて母なども行つたらしかつた。とはいえ、興味をもつても直に忘れがちな子供のおりのこととで、川上音二郎が薩摩さつまガスリの着物に棒縞ぼうじまの小倉袴こくらばかまで、赤

い陣羽織を着て日の丸の扇を持ち、白鉢巻をして、オツペケ節を唄わなかつたならば、さほど分明^{はつきり}と覚えていなかつたかも知れない。

しかし子供ごころに、オツペケペツボの川上はさほど傑い人だと思つていなかつた。それよりも芳町の奴の方が遙かに——芸妓^{はる}でも抱え車^{かかぐるま}のある——傑い女だと思つていた。なんで、川上のおかみさんになぞなるのだろうと、漠然^{ばくぜん}とそんなふうに思つたこともあつた。その後、川上座の建築が三崎町^{みさきちょう}へ出来るまで、奴の名には遠ざかつっていた。

けれどもそれはわたしが彼女の名に接しなかつただけで、彼女には新らしい生活の日の貢^貢が、日ごとに繰りひらかれていつた。

そしてその五、六年の間に、川上の単身洋行が遂行された。それは生涯をあらたに時直そうとする目的をもつた渡航であつた。

そのおり川上は、壮士俳優を止めてしまおうと思つていたとかいふことだつたが、米国に渡つてから再考して見なければならないと思い、充分に考慮してのち、やつぱり最初自分の思立つたことは間違つていなかつたと気がついた。それから直に帰朝した彼れは、もうすぐに演劇革進論者であつた。時流より一足さきに踏出すものの困難を、つぶさに嘗めなければならぬ運命を彼れは担つてかえつてきたのだつた。そして、当然、夫の、重い人生の負担に対し、奴のお貞も片荷を背負わなければならぬ運命であった。漸く平静であろうとした彼女の人生の行路が、その時から

一段嶮けわしくなり、多岐多様になつていつた分岐点が、その時であつた。

川上音二郎の細君の名が、わたしたちの耳へまた伝わつて来たころには、彼女は奔命ほんめいに勞れきつていたのだ。彼女は（最近引退興行のおりに、『演芸新聞』に自己の談話として載せたように）芸妓から足を洗つて素人しろうとになるにしても、妾めかけと呼ばれるのがいやで、どうか巡査でもよいから同情の厚い人の正妻になり、共稼ともかせぎがして見たいと思つていたので、川上との相談もととのい結婚はしたが、勝氣の彼女としては夫とした川上をいつまでもオツペケペツポではおきたくなかったのだ。

在米一年半ばかりで、野村子爵に伴われて帰つて來た川上は、

洋行戻りを土産に、かつて自分がひきいていた一団のために芝居みやげを打たなければならなくなり、浅草区駒形の浅草座を根拠地にして、「又意外」で蓋ふたを開けた。その折の見物の絶叫は、凄すさまじいほどで、新派劇の前途は此處に洋々とした曙あけぼのの色を認めたのであつた。それに次いで起つた問題は、劇道革進の第一程として、歐米風の劇場を建設することで、川上は万難を排してその事業に躉ばくしん進した。それとても奴の力がどれほどの援助であつたか知れなかつた。

浜田屋亀吉の娘で芳町の奴である細君の名は、貧乏な書生俳優、ともすれば山師と見あやまられがちな川上よりも、信用が百倍もあつた。細君の印形いんぎょうは五万円の基本金を借入れて夫の手に渡

し、川上座の基礎はその金を根柢として築きあげられていった。

様々な毀誉褒貶きよほうへんのうちに、夫妻の苦心の愛子——川上座は出来

あがつていつた。もうやがて落成しようとした折に、不意に夫妻の仲に氣まずい争いが出来た。しかもそれが世間にありがちな、

ほつとした一時の安心のために物質的な関係からおこつた問題で

はなかつた。奴は、一も夫のため、二も男のためと、そうした社会にあつては珍らしい貞節のかぎりを尽し、川上を世に稀まれな男

らしい男、真に快男子であると、全盛がもたらす彼女の誇りを捨て、わが生命いのちとして尽していたのである。それが、ある女に子ま

で産ましているという事がわかつた。その女はある顕官の外がいしょ

妾うで、川上はその女を、上野鶯うぐいすだに渓の塩原温泉に忍ばせてあ

るという事までが知れた。奴は養母の前へも自分の顔が出されないようと思つた。けれど怨み死に死んでしまうほど気が小さくもない彼女は、憤懣ふんまんの思いを誰れに洩すよりは、やつぱり養母に向つて述べたかつた。それがまた、川上との縁は自分の方から惚れ込んだのでもあり、養母も川上の男らしいところを聾ひいき頑づらにしていただけに、言うのも愁かつかつたが、聴く方の腹立ちは火の手が強かつた。何分にも奴にむかつて芸人の浮氣沙汰ざたとして許すが、不義の快楽は厳しくいましめたほどの亀吉、そうした話を聴くと汚ないものに触れたように怒つた。川上の産ませた子を誤魔化ごまかして、秘密に里子にやつてしまつたということをきくと、そんな夫とは縁を断つてしまえと言出した。

川上は浜田屋へ呼びよせられて来てみると、養母と奴とは冷か
な凄い目の色で迎えた。三人が三つ鼎になると奴は不意に、鬚の
根から黒髪をふつつと断つて、

「おつかさんに面目なくつて、合す顔がありませんから」

と、ぶいと立つて去つてしまつた。それにはさすがの策士川上も
施す術もなくて、氣を呑まれ、啞然としているばかりであつたが、
訳を聞くまでもない自分におぼえのあること、うなだれていよい
り他はなかつた。養母にとりなしを頼もうにも、妻よりも手強
い対手なので、なまじな事は言出せなかつたのであろう。も一度
海外へ出て、苦学をしてのち詫びにくるから、奴は手許へあずか
つておいてくれと詫を入れた。けれど亀吉はいつかな聴入ればし

ない。

「もとの通りにして返したならば受取ろう。」

それが養母の答えであつた。川上は是非なく、同郷の誼のある金子堅太郎男爵の許に泣付いていった。何故ならば、金子男が、伊藤總理大臣の秘書官のおり、ある宴席で川上の芝居を見物するようになすすめて、口をきわめて川上の快男子であることを説いた。こうした予備知識を持つて、はじめて川上を見た奴は、上流貴顕の婦人に招かれても、決して川上が応じてゆかないということなども聴いて、その折は面白半分の興味も手伝つたのであつたが、友達芸妓の小照と一緒に川上を招いて饗^{きょうおう}応^{でいり}したことがある。それが縁で浜田屋へも出入するようになり、伊藤公にも公

然許されて相愛の仲となり、金子男の肝入りで夫妻となるようにならぬつた仲である。それ故、そういうことがもつれてむずかしくなつては、金子氏にすがるよりほか、養母も奴も聴入れまいと、堅い決心をもつて門をたたいたのであつた。その代りには断然不始末のあとを残すまいという条件で持込んだ。そして、漸くその件は落着した。

ひとつ過ぎればまたひとつ、内憂に外患はつづいて起つた。夫妻が漸やつと笑顔を見せるようになると、またしても胸に聞える悩みの種、川上座の落成に伴う新築披露、開場式の饗宴などに是非なくてならない一万円の費用の出どころであつた。けれども奴の手許からは出せるだけ出し尽している上に、五万円の方もその

ままになつてゐる。開場式さえあげれば入金の道がつくので、それを目當にして高利貸の手から短かい期限で、涙の滾れるような利子の一円を借り入れ、新築披露の宴を張り、開場式を華々しく挙行した。

川上座——この夫婦が記念としてばかりでなく、劇壇新機運の第一着手の、記念建物としても残しておきたかつた川上座は、三崎町の原に、洋風建築の小ぢんまりとした姿を見せた。いまは冷氷庫おりぐらになつてしまつたあの膨大な東京座も、その頃新築され、後の方には旧女役者の常小屋じょうごやの、三崎座という小芝居があつた。夏などは東京座や川上座へゆくには、道が暑くてたまらないほど小蔭ひとつない草いきれのしている土地であつた。そのくせ、座

へはいつてしまうと——ことに東京座などはだだつ広いのと入りがなかつたので、涼しい風が遠慮がなさすぎるほど吹入つて、納涼氣分に満ちた芝居小屋であつた。川上座は帝劇と有楽座をまぜた造り方であつたので、その時分の人たちにはひどく勝手違いのものであつたが、開場式に呼ばれたものは川上の手腕に誰れも敬服しあつていた。一千にあまる来賓はすべての階級を網羅もうらし、その視線の悉くそがれてゐる舞台中央には、劇場主川上音二郎が立つて、我国新派劇の沿革から、歐米諸国の劇史を論じ、満場の喝采かつさいをあびながら挨拶あいさつを終つた。その側に立つ奴の悦びはどちらほどであつたろう。共に劳苦を分けた事業の一部は完成し、夫はこれほどの志望こころざしを担うに、毫も不足のない器量人であると、

日頃の苦悩も忘れ果て、夫の挨拶の辞終りに共に恭しく頭をさげると、あまりの嬉しさに夢中になつていたために、先日のいきさつから附鬚^{つけまげ}を用いている事なぞは忘れてしまい、音がして頭から落ちたもののあるのに気がつかなかつた。湧^{わきあが}上つた笑い声に気がついて見ると、あにはからんやの有様、舞台監督は狼狽て緞帳^{どんちよう}をおろしてしまつたが――

赤面と心痛――開場式に頭が飛ぶとは――彼女は人知れずそれを心に病んだ。それが箴^{しん}をなしてというのではないが、もとより無理算段でやつた仕事だけに、たつた一万円のために川上座は有利貸の手に奪^とられなければならなかつた。川上は同志を集めて歌舞伎座で手興行をした。わが持座^{もちざ}を奪われぬために、他座で開演

した心事に同情のあつた結果は八千円の利益を見、それだけは償却したが、残る四千円のために彼らは苦しみぬいた。

そのころの住居が大森にある洋館の 小屋しょうおく であった。金貸に苦しめられた川上が憤然として代議士の候補に立つたのは、高利貸退治と新派劇の保護を 標榜ひょうぱう したのであつたが、東京市の有力な新聞紙——たしか『万朝報よろずちょうほう』であつた——の大反対にあつて非なる形勢となつてしまつた。

それらが動機となつて川上夫婦の短艇旅行ボートは思立たれた。厭世觀と復讐ふくしゆう の念、そうした夫の心裏を読みつくして、死なば共にとの意氣を示し、死ぬ覚悟で新しい生活の領土を開拓し、生命の泉を見出そうではないかと、勧めはげましたのは奴であつた。

妻の言葉に暗示を与えてふるい立つた川上は、失敗の記念となつた大森の家を忍び出る用意をした。無謀といえ巴限りない無謀であるが、そのころはまだ郡司大尉ぐんじが大川から乗出し、北千島はての果こぎつまでも漕附けた短艇ボート探検熱はまだ忘れられていなかつたから、川上の機智はそれに学んだのか、それともそうするよりほか逃出する考けえがなかつたのか、ともあれ、人生の嶮けわしい行路に、行き惱ボートんだ人は、陰惨たる二百十日の海に捨身の短艇ボートを漕出した。

短艇日本丸は、暗の海にむかつて、大森海岸から漕ぎだされた。ものずきな夫婦が、ついそこいらまで漕いでいつてかえつてくるのであろうと、気がついたものも思つていたであらうが、短艇の中には、必要品だけは入れてあつた。寝具のかわりに毛布が運ば

れてあつた。とはいへ、幾日航海をつづけようとするのか、夫婦にも目あてはなかつた。夫は漕ぐ、妻は万一のおりにはと覺悟をしていたが、夢中で、小山のような島があると見て漕ぎつけた場所は、横須賀軍港の軍艦富士の横つぱらであつた。

鎮守府に呼ばれて 訊問(じんもん)にあつたが、全く何処とも知らず流されて来て、島かげを見付けてほつとした時に夜はほのぼのと明け、それが軍艦であつた事を述べて許された。その上、咎められたのが好都合になつて様々の好誼(こうぎ)をうけ、行手の海の難處なども懇篤に教え諭(さと)され、鄭重(ていちょう)なる見送りをうけて外洋(そとうみ)へと漕出した。

それからの、貞奴となるまでの記憶の頁は、涙の聯珠として、彼女の肉体が亡びてしまつても、輝く物語であろう。遠州灘の荒海——それはどうやらこうやら乗切つたが、掛川近くになると疲労しつくした川上は舷で脇腹をうつて、海の中へ転げおちてしまつた。船は覆つてしまつた。奴は咄嗟にあるだけの力を出して、沈んだがまた浮上つた夫を背にかけて、波濤をきつて根かぎり岸へ岸へと泳ぎつき、不思議に危難はのがれたが、それがもとで川上は淡路洲本の旗亭に呻吟する身となつてしまつた。その報をきいて駆付けた門弟たちは、師の病体を神戸にうつすと同時に「楠公父子桜井の訣別」——という、川上一門の手馴れた史劇

を土地の大黒座で開演した。それが土地の気受けに叶い、神戸における楠公様の劇である上に、川上の事件は当時の新聞が詳細に記述したので、人気は弥がうえにと添い、入院費用はあまるほど得られた。川上の恢復も速かであつた。とはいへ、川上は健康を恢復すれば、またも行方定めぬ波にまかせて、海の旅に出ると言つてきかなかつた。その折、近くに開かれる仏蘭西の博覧会へ日本劇を持込んではとの相談が来た。

それこそ、新生活を開拓しよう、無人島へでもよいから行きつこうと思つていた夫婦には、渡りに船の相談なので、一も二もなく渡航と定め、川上一座一行廿一人は結束して立つた。婦人はその中にたつた二人、いうまでもなく一人は奴で、一人は川上の姪めい

の鶴子（在米活動俳優として名ある青木鶴子、後に早川雪洲の妻）で、奴は単に見物がてらの隨行、鶴子は彼地で修業するの目的であつた。

亞米利加のサンフランシスコに一行は上陸した。仲に這入つた人の言葉ばかりを真に受けて、上陸後四日間ばかりをうやむやに過してしまふと、仲人は逃亡してしまつた。知らぬ間に川上の名義で借りられた莫大な借金が残つてゐるばかり、約束になつてゐるといった劇場へいつて見れば釘附けになつて閉されてゐる。開演しさえすればとの儘^{はか}ないたのみに無理算段を重ねていた一行は、直に糊口^{ここう}にも差支えるようになり、ホテルからも追出されるみじめさ、行きどころない身は公園のベンチに眠り、さま

よい、病犬^{やみいぬ}のように蹠々^{そうそうろうろう}として、僅かの買喰いに餓^{うえ}をしのぐよりせんすべなく、血を絞る苦しみを忍んで、漸くボストンのカリホルニア座に開演して見たものの、乞食^{こじき}の群れも同様に零落^{おちぶ}れた俳優^{やくしや}たち、それがなんで人気を呼ぼう、当ろうはずがなかつた。窮乏^{あた}はいやが上にせまる、何処の劇場でも対手にはしてくれない。ことに貧弱きわまる男優^{おやま}が女形であるときいては、まるで茶番のように笑殺され、見返られもしなかつた。

一行は十月の異国の寒空に、幾日かの断食^{だんじき}を行なって、まるで聖徒の苦行のような辛酸を嘗めた。

シカゴ、ワシントンストリートの、ライリリツク座の座主の令嬢こそ、この哀れな、餓死^{ひん}に瀕した一行の救い主であつた。ポツ

トン令嬢は日本劇に趣味をもつていたので、父親を納得させて川上一行を招くことにした。座主はお嬢さんの酔興を許しはしたが、算盤そろばんをとつての本興行は打てぬので、広告などは一切しないという約束のもとに、とにかく救いあげられた。

座主の方で広告はしないとはいゝ、開けるからには一人にでも多く見物してもらいたいのが人情である。そこでどんなに窮した場合にも残しておいた、舞台で着る衣服 甲かつちゆう 胄かぶに身を装い、おりから降りしきる雪の辻々、街まちまち々を練り歩いて、俳優たちが自ら広告した。絶食しつづけた彼らが、重い鎧よろいを着て、勇氣りんぎ凛然たる顔附きをして、雪の大路を潤歩かつぽするその悲惨なる心根——それは実際の困窮を知らぬものには想像もつきかねるいたまし

さである。舞台に立つて、児島高徳こじまたかのりに投げられた雑兵ぞうひょうが、再び起上つて打向つてくるはずなのが、投げられたなりになつてしまつたほど、彼らは疲勞困憊こんぱいの極に達していた。百弗ドルの報酬を得てホテルに駈込かけこんだ時には、食卓にむかつた誰れもかれも、嬉し泣に、渚さめざめ々としないものはなかつたという。

一座はその折、女優がなかつたために苦い経験をしたので、奴は見兼ねてその難儀を救つた。義理から、人情から、それまで一度も舞台を踏んだことのなかつた身が一足飛びに、勝すぐれた多くの女優が、明星と輝く外国において、貧乏な旅廻りの一座のとはいえ、一躍して星女優プリマドンナとなつたのである。しかし、暫くの間はほんの田舎廻りにしか過ぎなかつたが、かえつてそれは、マダム貞

奴としての要素をつくる準備となつたといつてもよいが、一行の難渢は実に甚だしかつた。ボストンへ廻つて来たおりには、心労の結果川上が病氣に罹り、座員のうち二人まで異郷の鬼となつてしまつた。

「俺おれが全快するまでは下へ_た手なことをするな。」

川上は病いの床でそう言続けていたが、生活のためには言附けも背そむかなければならなかつた。それに為すこともなく日を過しているのでは、悲境に、魂を食われてしまつたような座員の団結も頼まれず、座員の元氣を鼓舞するには劇場へ出演するに限ると、川上にかくれて貞奴が一座を引連れて出た。多分そのおりのことであろう。二人の座員の死んだのをどうする事も出来ぬので、土

地の葬儀会社へ万端のことを頼んでおいた。劇場から帰つてきて見ると死者の髪は綺麗に剃られ、顔も美しく化粧され、髪も香水がつけて梳すられてあり、新しい礼装をさせられて花輪を胸に載せ、柩の中に横たわらせられてあつた。昨日まで食を共にし、生死もひとつにと堅い団結を組んできた一行のものは、その死者の姿を見ると、いかにも安易として清げなさまで、昨日までの陋むき苦しい有様とはあまり違つて、立勝つて見ゆる紳士ぶりに、生きている方がよいか、死んだ者の方がよいかと妙な風な考えになつて、頭をさげるばかりだつたという話を聴いた。ことに死者の胸に組合せた手の指の爪まで綺麗に磨かれてあつたという事が、舞台で化粧をこそすれ、何事にも追われがちの不如意の連中には、

指の爪のことまで 繖^{デリケート} 細な気持ちを持つていられなかつた人々が、感銘深くながめたという有様だつた。

病床で川上が言続けていた、フランス・パリーの博覧会——そこそこ、マダム貞奴の名声を赫^{かくかく}々と昂^あげさせたものである。海外にあつて最も輝かしかつた三ツの歡喜、そのひとつは亞米利加^{アメリカ}ワシントンで、故小村公使の尽力で、公使館夜会に招かれ、はじめて上流社会に名声を博し得たこと。またひとつは英吉利^{イギリス}で上村大将に遇^あり、その力にてバッキンガム・パレスで、日本劇を御覧に入れたこと——たしかそのおり貞奴は道成寺^{どうじょうじ}の踊の衣裳のままで御座席まで出たとおぼえている。——もひとつは、仏蘭西^{フランス}のパリーで栗野公使の尽力により、一行が熱望しきつていた博覧会

の迎えをうけたことである。この事こそ、ほんとに彼らのためにも、日本劇のためにも前代未聞の出来ごとだつたのだ。あらゆる天下の粹を集めた、芸術の源泉地仏蘭西パリーで、しかも、そのもろもろの美術、工芸、芸術品に篩いをかけた博覧会々場である。見る人もまた一国一都の人ばかりでなく、世界各地の人を網羅し尽している。その折に、その中で、耳目を聾そばだたして開演する事が出来ようとは、いかに熱望していたとはいえ、昨日までの田舎廻り、乞食芝居の座員には、万に一の希望も絶望であろうとされていたものが——加うるに日本劇川上一座の人気は、空前絶後とされ、夢想にも思いも浮べぬ、彼地の劇界を震撼させたものであつた。なおその渡仏の前、ボストンで英吉利の名優ヘンリ

ー・アーヴィングの「マーチヤント・オブ・ベニス」が当つたのにかぶせて日本風に改作し「シャイロツク」として上演したが、その入場券一弗^{ドル}が三弗五弗というふうに競^{せりあ}上げられたというのは、もの珍らしさが手伝つたとはいえ大成功といわなければならぬ。かくして帰還した川上夫妻の胸には、仏蘭西の芸術家が重く見るオフシエ・ダカジメ三等勲章^{さん}が燦としていた。

貞奴、貞奴、その名は日本でより海外に高く拡^{ひろ}まつた。名^{めいじつ}実^{じつ}は川上一座でも、彼の一座でなく彼女の一座として歓迎された。一度帰朝した彼女らは陣容を改め、今度こそ目的のない漫然とした旅役者ではなく、光彩ある日本劇壇として明治三十四年に再び

渡欧した。座長はいうまでもなく川上音二郎、星女優^{スター}は貞奴、一座の上置きには故藤沢浅二郎、松本正夫、故土肥庸元（春曙）の諸氏のほかに、中村仲吉という女優（この優^{ひと}は大柄の美人で旅廻りの女役者としてはほんとに芸も立派な旧派出の女であつた）を加えて一行は廿六、七人であつた。仏、英、露、独、西、伊、奥地の諸国を巡業し到る処で大歓迎をうけた。この興行から帰つて來ると故国日本でも貞奴を歓迎して、化粧品には争つてマダム貞奴の仏蘭西土産であることを標榜^{ひょうぼう}した新製品が盛んに売出され、広告にはそのチャーミングな顔が印刷されたりした。そして、川上の懇望によつて、故郷の檜舞台に、諸外国の劇壇から裏書きされてきた、名譽ある演技^{えんぎ}を見せたのは、彼女が三十三歳の明治

卅五年、沙翁^{セクスピア}の「オセロ」のデスデモナを、鞆音夫人^{ともね}といふ名にして勤めたのが、初舞台である。そして亡夫の七回忌にあたる大正六年十月、日本橋区久松町の明治座で女優生活十五年間の引退興行を催し、松井松葉氏によつて戯曲となつた、伊太利^{イタリア}の歌劇「アイーダ」を上場した。川上の旧門弟とは、貞奴がたてた川上の銅像や、郷里の墓所のことなどから、心持ちの解けあわない事があつて出演しなかつたが（彼らは川上の望んでいた芝高輪^{たかなわ}泉岳寺の四十七士の墓所の下へ別に師の墓を建て、東京における新派劇団からの葬式を営んだ）幸いに伊井、河合、喜多村の新派の頭立^{かしらだ}つた人が応援して、諸方からの花輪、飾りもの、造りもの、積ものなどによつて賑わしく、貞奴の部屋や、芝居の廊下は

お俊い氣分、祭礼氣分のようすに盛んな飾りつけであった。福沢氏の催した連中は興行中を通して五千人の申込みで、その多くは招待であつた事なども素晴らしい事として語りあわされた。

本名のお貞と、芳町時代の奴の名とあわせて、貞奴と名乗つた女優の祖を讃するに、わたしは女優の元祖出雲のお国と同位に置く。世にはその境遇を問わず、道徳保安者の、死んだもののように冷静、無智、隸属、卑屈、因循をもつて法^(のり)とし、その条件にっこしでも抵触すれば、婦徳を紛糾^(うんぬん)する。しかし、人は生きている。女性にも激しい血は流れている。人の魂を汚すようなことは、その人自身の反省にまかせておけばよいではないか？わたしは道学者でない故に、人生に悩みながら纖^(ほそ)い腕に悪戦苦闘して、切

抜け切抜けしてゆく殊勝さを見ると、涙ぐましいほどにその勇気を讃え嘉したく思う。

ああ！ 貞奴。引退の後の晩年は寂寥^(のちりょう)であろう。功為^(な)り名遂げて身退くとは、古えの聖人の言葉である。忘れられるものの寂しさ——それも貴女^(あなた)は味わねばなるまい。しかし貴女は幸福であったと思う。何故なら貴女は、愛されもし愛しもし、泣いたのも、笑つたのも、苦しんだのも、悦んだのも、楽しんだのも、慰められたのも、慰めたのもみんな真剣であつた。それゆえ貴女ほど信実の貴い味を、ほんとに味わつたものは少ないであろう。その点で貴女は、真に生甲斐^(いきがい)ある生活をして來たといわれる。わたしは此處に謹んで御身の光輝ある過去に別れを告げよう、さようなら

マダム貞奴！

大正九年三月

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1920（大正9）年2～4月

※「松居松葉」と「松井松葉」、「嘗《な》め」と「嘗《な》め」の混在は、底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2005年9月24日作成

2007年4月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

マダム貞奴

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>